

同僚代表謝辞

内田 弘

高橋七五三先生、長い間、本学および経済学部のために御尽力くださりまして誠にありがとうございます。いま先生の胸中に去来する思いを推察いたしますと感無量であります。深い感慨で本日をお迎えのことでしょう。

実は最近先生にこれまでの経歴—経済学を中心にした学者・研究者としての歩みについて、時間をかけて伺う機会がありました。そのお話をまじえて同僚を代表して謝辞をのべさせていただきますとおもいます。それ(先生への聞き取り)はのちに『専修大学社会科学研究所月報』に載る予定ですのでぜひ御覧ください。

そのお話で印象的だったのは先生が慶応大学経済学部在学中に、出版されたばかりのジョン・ロビンソンの『不完全競争の経済学』(1933年、昭和8年)の原書(英語)を読破し「ケンブリッジ学派における価格理論」という論文を書いておられることです。先生はご自分のことを「大きな成功も失敗もない何事にも慎重で中庸な人間」と規定していますが、その論文が『学生論文集』(第2集、1936年、昭和11年)に載ったことから考えても、その自己規定がかならずしも当たらないのではないかと思います。

先生の卒業論文も近代経済学関係で、限界効用学派に関するものでした。H・H・ゴッセンの大著(Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln)の研究でした。

しかし先生はほぼ同時に昭和マルクス主義の影響を、とくに学生サークル活動をとうして受けました。なかでも『日本資本主義発達史講座』(1932—33年、昭和7—8年)や山田盛太郎氏の『日本資本主義分析』(1934年、昭和9年)を参考に「日本化学工業史」という論文を書き「関東7大学経済弁論大会」で報告されました。

戦後の日本のマルクス経済学も近代経済学も、その基礎は昭和前期(1926—45年)の戦前・戦中につくられたとすれば、高橋先生はその日本の経済学の形成期に若い人間形成期を生きたわけです。理論の面では近代経済学を詳しく研究され、現状分析ではマルクス経済学(とくに『講座』や『分析』)を用いて「十五年戦争」に雪崩こんでゆく当時の日本資本主義を見つめられたのです。

大学卒業ののち金融関係の研究所(銀行集会所、全国金融統制会調査部)に就職し、その後兵

役で中国戦線にゆきます。限界状況における人間の生きざま、日本軍という組織の戦場での規律、異国民どうしの戦地での遭遇などについて深刻に考えさせられたと伺いました。もっとも先生御自身はこの経験は辛くも興味深いものだったと総括なさっています。

戦後、林業関係の研究所(林業経済研究所)で森林の統計調査を実際に行い、のちに農業金融の研究所(農林中央金庫)にも在職しました。専修大学にこられてからは経済学概論、経済学方法論など比較的理論的な科目を担当してられました。しかし先生はこのような現状分析をプロの調査マンとして行ってきた経験の持ち主なのです。

ただ私の印象では、人はその処女作に帰るということが高橋先生によく当てはまるように思われます。先生は学生のころから大変数学が好きで、ご自分の知的体質はむしろ理工系かなと考えたことがあるそうです。抽象的な論理的な思考への傾倒と好みが若いころから一貫して息づいているようです。先日、先生の経歴を伺ったとき、林業の調査で日本の中国地方の山地奥深く入り、寒村に泊まって、森林の面積をはかったことに話がおよびました。その計りかたがいかにおおざっぱかそれが統計数値になると、いかにも客観的なデータに見えるようになるか、シニカルに語っていました。どうやら先生の調査マンの経験は実証というものへの方法的懐疑という角度から、先生の身についているようです。

高橋先生は東京がまだ東京市といったころ(1914年、大正3年)小石川区(いまの文京区)に生まれ、そこで育ちました。江戸っ子です。そのからっとした精神風土で先生固有のスケプティシズム(skepticism 懐疑主義)とリゴリズム(rigorism 厳格主義)が形成されてきたように思われます。先生には、いわば高く晴れた秋空のような方法的懐疑精神が脈打っているのではないのでしょうか。それは先生固有のものでしょうか。しかし先生が生まれ育った東京の山の手、頭の良い合理的で厳しい父上、慶応大学在学経験、近代経済学の理論的探求、マルクス主義への傾倒、金融、林業、農業という対照的な分野での調査マンとしての経験、戦争体験、戦前・戦中から戦後への日本の激変など、異質で豊かな経験が、よく見受ける平板な相対主義、虚無的なオブスキュアランティズム(obscurantism 曖昧主義)に陥るのではなく、先生のばあいは、いったいなにが明晰で判明な真理であるのかをつねに問う方法的懐疑精神に深化しているのではないのでしょうか。

おそらく本日の最終講義でも、鮮明な論証の果てに新たな問題を提示することになるのではないかと予感します。これで終わりということのない「探求の論理」に忠実に、先生はこれからも研究を続けて行かれることでしょう。大病をわずらったお体をくれぐれもご自愛され、お元気にお過ごしください。また時折ご研究の成果を私たちにご教示くださることを希望してあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。